

## 平成26年度末に派遣を修了した大学院派遣教員に係る実践研究報告書

高知県教育委員会事務局人権教育課  
指導主事 有澤 拓也

### 1. 研究の成果と課題をふまえた平成27年度の実践内容

#### (1) 教職大学院における研究の成果と課題

鳴門教育大学教職大学院では、「教職員の協働による学校の教育改善」をテーマに実践研究に取り組んだ。実践研究の成果として次の5点が挙げられた。①学びのポートフォリオ等のツール活用を通して、生徒の目的意識が醸成され、自律的な学びが一定程度具現化したこと。②生徒の自己成長を促す根源的なエネルギーとなる「自分への信頼」が醸成されたこと。③教師-生徒間相互の信頼関係が向上したこと。④教師の指導の質的改善が図られたこと。⑤教職員の組織化が促進され教育改善が具現化したこと。以上のことから、当初に想定した本実践研究の目的は、一定程度達成されたととらえられる。

課題としては、教師による勇気づけ・価値づけの質を組織的に高め、同時にその量を増やしていくことが挙げられた。生徒と教師が毎日顔を合わせる学校教育活動では、どうしても生徒の日々の変容はとらえにくく、生徒自身にとっても自己の成長は実感を伴わないものである。そして成長を見取り、価値づけするはずの教師の視線は、生徒のできていないところに向いてしまう傾向がある（ネガティビティ・バイアス）。そのため、勇気づけ・価値づけについては、かなり意図的・組織的に実践していく必要がある。

より効果的に教育改善を生み出すために、生徒のよさや努力を見取る視座と、それらを価値づけるスキルを教師間で交流することが有効であると考えられ、そのための職員研修会やOJT型の人材育成の在り方について、検討していく必要があるととらえられた。

#### (2) 平成27年度の実践内容

##### 1) 本年度の所属における業務について

本年度4月より、高知県教育委員会人権教育課児童生徒支援班で勤務している。担当業務は高等学校生徒指導主事会、生徒指導上の問題行動調査、少年非行関係の事業のほか、校内研修や初任者研修、教員採用試験勉強会などの講師等も務めている。これらの事業を通し、教職大学院での学びを学校現場に還元していくことを自身の課題として取り組んだ。

このことにより、前任校と同様の教育課題を抱える高等学校等に、改善への見通しを持たせるとともに、それぞれの学校の教育課題解決に向け、意識化、意欲化、実践化の流れを促す働きかけを行っていきたいと考えた。

また、本課においては、「開発的な生徒指導（児童生徒のよさや可能性を引き出す生徒指導）」を推進している。そのため、「児童生徒の内面」に働きかける教育活動の展開を基軸に、小中高の連携を図っていくということにも取り組んだ。

生徒一人ひとりにしっかりとかわり、生徒が持つ可能性を最大限に高めていこうとす

る学校文化を持つ組織同士の校種間連携は、その質を一層高めるといえる。つまり、連携すること自体を目的とせず、自校の教育改善という目的を達成するための「手段」としての連携が行われるということである。児童生徒に自己のよさを自覚化させ、将来の夢や目標を持たせる教育活動を、小中高の12年間を通して展開していくこと、そしてそれを具現化する指導論と組織論を段階的に導入していくことが、年度当初に掲げた長期的構想であった。

## 2) 実践内容

本年度の担当業務のうち、教職大学院での学びを最も効果的に周知できる機会は、年間2回（5月、10月）開催される高等学校生徒指導主事会である。本年度の同会においては、生徒指導主事の課題意識を生徒指導主事間で共有すること、それらの課題に対し効果のある指導を提示するという2点をねらいとした。

### ① 課題の共有

5月の生徒指導主事会では、グループ協議を行い、生徒指導主事が日頃感じている「生徒の課題」について意見を出し合った。「大人しくて言われたことはできるが、目的意識が弱い」また、「自己中心的な言動も見られる」といった声が多く聞かれた。学校の特色や地域性などは様々であるが、生徒が抱える教育課題については多くの共通性が見られ、自己の成長が委縮し、社会性が縮小してしまっている生徒像が浮かび上がった。

### ② 「課題」に対して「効果のある指導」

10月に地区別に開催した高等学校生徒指導主事会では、5月に生徒指導主事間で共有した課題に対し、効果のある指導を2つ紹介した。ひとつは高校生の目的意識を醸成するツール「学びのポートフォリオ」、もうひとつは生徒の主体性や社会性を育むための「生徒の力を活用した取組」である。それぞれについて説明した後、いかに自校での実践につなげていくかをグループで協議した。

## 2. 平成27年度の実践の成果と課題

本年度の実践の成果としては、「開発的な生徒指導」の必要性が、生徒指導主事に一定程度理解されたことととらえる。次年度以降は、開発的な生徒指導がさらに効果的に進められるよう、教職員の組織化を促す組織マネジメントの理論と実践について、担当する事業に組み込んでいきたい。これらのことを通じ、高校生の主体的な学びにつなげていくことが課題であり今後の展望である。

混迷する現代の日本社会で、自分のよさや特徴を最大限に生かしながら自己実現していく力を生徒に携えるために、高校教育では「社会生活」と「学校生活」、そして「将来の自分の夢」と「現在の自分の学び」を常に関連づけながら教育活動を行うことが重要になってくるだろう。そのような教育活動を通し、生徒に目的意識とそれに裏打ちされた学習意欲を持たせることが求められている。高校の教育改善と、それによる生徒の学びの質的転換を促進するために、本実践研究をさらに精緻化し、他校への汎用性を高めていきたいと考えている。